

2026年3月18日

報道機関各位

学校法人 塚本学院

大阪芸術大学

**文芸学科4年生・高橋 菜々実さんが「織田作之助青春賞」を受賞！
芥川賞作家も認めた「確固たる型」。新進作家の登竜門で285編の頂点へ。**

～受賞作『なきから』が文芸誌『三田文学』に全文掲載、3月4日に贈呈式開催～

大阪芸術大学（所在地：大阪府南河内郡、学長：塚本 邦彦）文芸学科4年生の高橋 菜々実さん（21）が「2025年度織田作之助青春賞」を受賞いたしました。応募総数 285 編の中から選ばれた本作は、本学出身者として初の受賞となる快挙です。受賞作『なきから』は、2026年1月発売の文芸誌『三田文学』2026年冬季号に全文掲載されており、3月4日には大阪市内で贈呈式が行われました。



撮影：岩井秋蓮（写真学科）

■ 激戦を勝ち抜き文芸学科の歴史に刻まれた、新たな一歩

「織田作之助青春賞」は、大阪生まれの作家・織田 作之助（1913～1947年）にちなみ、彼が初めて懸賞小説に応募した24歳までの若手作家を発掘することを目的とした公募賞です。数多くの新鋭作家を文壇へ送り出してきた「若手作家の登竜門」として知られ、受賞作は伝統ある文芸誌『三田文学』に全文掲載されることから、プロへの確かな一歩を約束する賞として毎年全国各地から高い志を持つ若者が挑んでいます。

2025年度は全国各地から285編の応募があり、その中から大阪府在住で本学文芸学科4年生の高橋 菜々実さんの短編小説『なきから』が受賞作に選出されました。本賞における大阪芸術大学出身者の受賞は今回が初めてとなりました。

■受賞作『なきがら』と作家・高橋 菜々実さんの原点



受賞作『なきがら』は、小学生の少女が下校途中に犬の死体を見つけ、そこに同級生の男子が現れる場面から始まる物語です。高橋さんは本作について、「子どもの頃から抱いていた大人や学校の先生に対する不信感や怒りがそのまま反映されている」と語りました。

影響を受けた作家に中上 健次氏や綿矢 りさ氏を挙げ、「無駄なものが極限まで削ぎ落とされているのに、描写が足りないと感じさせない」ドライな文体を志向して執筆されました。受賞の知らせを受けた際も「正直、未だに感情が全く動いておらず、妙に冷静です」と語るその姿勢には、作家特有の冷徹な観察眼が垣間見えました。

■高橋 菜々実さんインタビュー

——大学在学中の受賞となりました。今の心境は？

正直、未だに感情が全く動いていません。だからまだ感想と呼べるものは私の中にはありません。受賞の知らせを聞いたときも、「ああ、そうなんですか」という感じで、妙に冷静でした。まだ実感がわいていないから感情が動かないのか、自分でもよく分かりません。受賞して、文芸学科の先生方からお祝いの言葉を頂いたりして、それ自体は凄く嬉しいのですが、個人的な感情はずっと平静なままです。

——受賞作「なきがら」はどんな作品なのですか？

「なきがら」は、小学生の女の子が下校途中に犬の死体を見つけ、そしてそこに同級生の男の子が現れて……というような内容の話です。私は純文学が好きなので、純文学テイストが強めの作風にしました。私は子どもの頃から、大人や学校の先生に対して、不信感や怒りを持っていたのですが、「なきがら」にはその怒りがそのまま反映されていると思います。

——好きな作家や作品を教えてください。

中上 健次が特に好きです。とにかく、文体がかっこいい。短く切り込んでくるようなドライな文体で、無駄なものが極限まで削ぎ落とされているのに、それでいて描写が足りないと感じさせない。ディテールまでしっかり描かれているのに、無駄がない。私はどうしても文章に無駄なものをくっつけてしまいがちなので、中上の文体には憧れがあります。中上の作品で特に好きなのは「浄徳寺ツアー」と「十九歳の地図」です。

綿矢 りささんの「蹴りたい背中」も凄く好きです。「蹴りたい背中」は、私が純文学を好きになるきっかけになった、思い入れのある作品です。冒頭の「さびしさは鳴る。」という一文で持っていかれて、読み終わったあと、「すごいものを読んでしまった」と思いました。今でも大好きな作品です。

——文芸学科での学びについては？

当たり前ですが、芸大の文芸学科に入ってから、自分の文章と深く向き合う時間が増えました。そうすると、自分の文章の癖や個性のようなものが自分でも分かってきて、少しずつですが、自分の文体をしっかりと乗りこなせるようになりました。それが自分の中で一番大きかったと思います。芸大に入る前は、自分がどのような文章を書く人間なのかが自分でも分かっていなかったのですが、芸大に入り、それまでとは比べ物にならないほど深く文章というものに向き合うことで、自分の書く文章を初めて自分で理解できるようになったのではと思います。

——将来の夢は？

現時点で夢と呼べるようなものは特にないのですが、強いて言うなら、これから先もずっと小説を書き続けることが夢ですね。

■芥川賞作家・玄月教授が見出した「確固たる型」

高橋さんが所属するゼミの担当教員であり、第122回芥川賞作家の玄月教授は、3年生の時点で彼女の才能を見出していました。「初めて原稿を読んだ時、『読み手への不必要な親切』とも言える余分な文章が目についたが、この人は確固たる『型』を持っているとわかった。書きたいことが明確に伝わってきた。揺るぎようのない信念のようなものが、芸術においてそれは、最大の長所である」と評価。「贅肉をそぎ落として、その長所を伸ばすことだけ考えたらいい」という指導に応え、高橋さんが自身の表現を磨き続けた結果が受賞をもたらしたと、高橋さんの快挙を称賛しました。



玄月教授 コメント

高橋さんの原稿を初めて読んだのは、私のゼミに入った3回生の4月。「読み手への不必要な親切」とも言える余分な文章が目についたが、この人は確固たる「型」を持っているとわかった。書きたいことが明確に伝わってきた。揺るぎようのない信念のようなものが、芸術においてそれは、最大の長所である。贅肉をそぎ落として、その長所を伸ばすことだけ考えたらいい、というような助言をしたと思う。そしてたゆまず書き続けて、結果を出した。受賞、おめでとう。

高橋 菜々実さん 受賞コメント

小説は私にとって、自分の内面と静かに対話できる小さな部屋のようなもので、その堅牢な部屋がいつだって私を守ってくれました。子供の頃から私はとにかく生きづらくて仕方がなく、まわりの人間すべてが敵にみえることすらあったのですが、ひとたび本を開けばまったく解放され、自由に息ができました。あるとき私は不意に『自分もこんな小説を書いてみたい』と思い、実際にペンを手に取ってみたのですが冒頭部分すら満足に書けず、小説を書くことはこれほどまでに難しいことなのか初

めて感じました。それから今まで自分が読んできた小説を改めて開いてみたところ、一行目が光を放っているように見えました。そのときの感動をいつまでも忘れずにいたいと思います。子供の頃の私は、まさか自分が小説を書く人間になるとは思っていなかったのですが、様々な縁がかさなり今、こうして小説を書く人間になれたことを嬉しく思います。私にこのような素晴らしい賞をくださった選考委員の方々、そして私を支えてくれた友人や先生方に感謝します。創作をする瞬間を積みかさねていき、いつか想像もつかないほど遠い場所へいけるように努力して参ります。



■ 受賞概要

賞の名称 : 2025年度 織田作之助青春賞

受賞作品 : 『なきがら』

受賞者 : 高橋 菜々実 (大阪芸術大学 文芸学科4年生)

掲載誌 : 文芸誌『三田文学』No.163 (2026年冬季号)

贈呈式 : 2026年3月4日(水) 会場: 綿業会館 (大阪市中央区)

主催 : 織田作之助賞実行委員会 (大阪市、大阪文学振興会、関西大学、毎日新聞社)

インタビュー記事 : https://www.osaka-geidai.ac.jp/topics/prize_odasakunosuke_takahashinanami